

教区だより

2021
5月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第375号

再開にあたって

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなつた現実には直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思えます。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願ひながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思えます。

このような願いを引き受け『教区だより』の発行を再開してまいります。



別れが 私の人生を 深くする

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

1頁 「ことば」

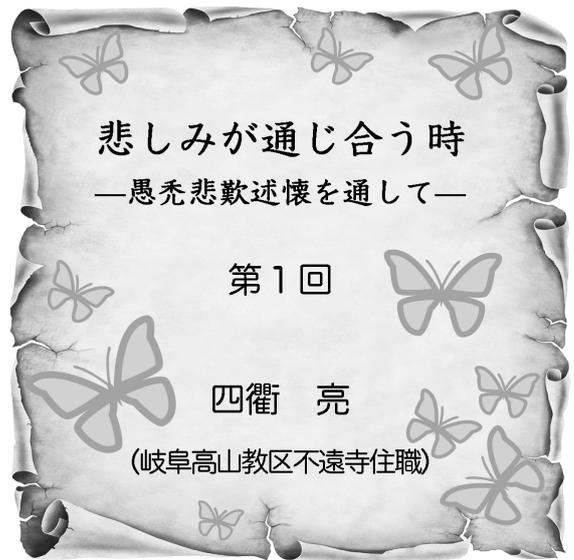
2、3頁 **連載** 悲しみが通じあう時 —愚禿悲歎述懐を通して—

《第1回》(再掲) 《第2回》 よつじ 四衢 あきら 亮 氏

4頁 教務所からのお知らせ



編集委員 ひえたに 比叡谷 まこと 真



「おそくかえっているあいだに、ぼくをさがしてた」。これは「自分が大事にされた体験」を尋ねたアンケートに答えてくれた一人の子どもの声です。夕闇がせまり心細くなって気持ちがいそいで家中、帰ってこない自分を探しているお母さんお父さんにばったり出会ったのでしよう。

「遅くなったね」と声をかけ抱いてもらい、「自分を心配し探して回ってくれる」親の温かきを感じ、大事にされていたことを知ったのでしよう。

「自殺しようとして、できなくて、帰ってきたとき、友だちが泣いてくれたこと」。これは同じアンケートに答えてくれた、お母さんお父さんのお一人の方の答えです。死ななかつたことに何よりも

安堵して、その死にたいほどの辛さや苦しみを一緒に泣いてくれる友だち。辛さや苦しさを悲しみ分かち合ってくれる友の存在が、私たちが生きる支えになるのでしよう。

「己上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり」（聖典五一〇頁）と結ばれる十六首の和讃が、親鸞聖人の「愚禿悲歎述懐」です。ただ、ここで歎かれていた「悲しみ」は、単に自分や世の中に失望したということではないのではないでしようか。通じ合い、分かち合う世界を開くことになったはずです。

「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の教に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし」と（聖典二五一頁）。これも和讃と同じく「悲歎述懐」と読まれてきた親鸞聖人の文章です。

この文章も和讃の表現も含めて、自身の虚偽性を決して見逃さず、誠実に自己を追求し、厳しく自己を見つめる親鸞聖人の言葉として語られることが多いようです。主体的な自己の確立を重視する近代的な思考からすると、その典型的な姿とされるのかもしれませんが。しかし、果たしてそうでしようか。そんなに厳しく自分を見つめる理性的な眼を持つのが親鸞聖人なのでしようか。

自分へのそんな厳しい眼を向ける人は、他者へも同じ眼を向けるでしようから、鋭利な刃物の前に立つよう、怖くて近づけたものではありません。晝齋で沈思黙考して自分を見つめる孤高の知識人というイメージがあるとすれば、それは実際と随分違うのではないかと思います。

そんな「怖い人」だったら、あんなにたくさん関東のお同行が慕うでしようか。関東から去られた後も、手紙が往復し、人々も通い、三十年もその生活を支えたのです。

先の言葉は、「誠に知りぬ」から始まります。自分で見つけて自分で分かったのではないのでしよう。私を心配し探して呼んでいるものがあつた、それは私自身と世の苦しみを分かち合い支え、一緒に悲しまれる深い願いであつた。その願いの教えに、よくよく知らされたという内容です。

だからそれは、その願いに呼びかけられている全ての者に通じ、共に歩む課題となるからこそ、多くの人の共感をよんでいるのです。

*文中のアンケートの文章について

『イノチのつづき』

—こどもとおとなへの4つの質問—

藤田貴士編著・村上康成絵

ジャパンマシニスト刊



浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし (聖典五〇八頁)

「説明では、たすからんをや」。「説明ばかりしてきた」。若いころからずっとお話を聞いた先生が、よくおっしゃっていた言葉です。それを聞きながら私は、そうか説明ではない話をできるようにならないといけないのか。説明ではない話をできるようにしようと思うてきました。しかし、これはとんでもない、思い違いでした。

この言葉は、説明以上のものを聞き取った人の

言葉なのです。「説明ではたすからない」ということに大きくうなずいて、人間の説明を超えた教えをいただいた人から湧き出る、深い感動の表現なのです。

私は、自分の頭で理解し、解釈して納得すること、教えを信じていることだと思っていたのです。その解釈と納得から出てくるのは、うまい解釈であり、納得のいく話ですから、上手な説明にはなっても、説明を超えるものではありません。

理解と解釈と納得と説明を大事にするのは、自分の理解や解釈で自分が正しくなり、自分が間違っているものにならないもの、成れると考えたからです。それで何より、自分が正しくなったり、間違っていることを恐れることになりました。

その恐れる姿が『歎異抄』に、「信心のおもむきをも、たがいに問答し、ひとにもいいきかすとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたたかいかたんがために、まったくおおせにてなきことを、おおせとのみもうすこと、あさましく、なげき存じそうろうなり」(聖典六四二頁)と表されています。

これまで、そんな不心得な人もいるのだと、自分の外に見ていましたが、これは間違はなく私自身のことです。教えを聞いてまじめに学べば、正しい理解を得て、間違いないものになるはずだと思っっていますから、得たつもの正しさに固執

します。それが、自分の正しさを善とし、他の理解を悪とし、言い合うことの元にあるのでしょうか。

「真実の心はありがたし、清浄の心もさらになし」は、自分で自分を解釈して規定した言葉ではないのです。それなのに、その言葉すら「真実・清浄なき身ですから」と自身を弁護する正しさにしてしまふことが虚仮不実そのものです。それを親鸞聖人が、「よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなき」(聖典六四〇頁)と言われたと、『歎異抄』は伝えていきます。

歎かれていた異なりは、外にあるのではなく私の中にあるのです。聞いた教えを自分の正しさの道具にする不実の有り様です。

この和讃は、親鸞聖人が浄土真宗に帰してもこんな有り様だと慨嘆されているではありません。解釈を頼みとし、説明に明け暮れる私たちをどこまでも見捨てず、排除せず、その問題を明らかにする浄土真宗を讃嘆されているのでしょう。人間が真実清浄になるのではないのです。私の不実を知らせるところに真実があるのです。教えに帰依するとは、説明不要の自身の姿を知らされ、それを確認し続けるということです。

教務所からのお知らせ

《得度》

四月の実施なし。

《住職任命》

三月の実施なし。

《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第二十五西組 長順寺前坊守 河原絹子

二〇二一年三月二十二日 九十三歳

《京都教区教師検定事前学習会について》

期間 八月十七日(火)～二十三日(月)

会場 京都教区会館大講堂

科目 真宗宗学・仏教学・声明作法・法規

対象者 本山で行われる「夏期教師試験検定」

(「真宗」5月号65頁参照)受検希望者

※今年度はコロナウイルス感染症感染拡大防止のため各科目定員を二〇名とします。詳細(開催要項)は『教区だより』6月号号送の裏に同封する予定です。

イマダカラ

前任職である父親が命終した。自身の思いを表現しない人だったが、ただ一点、息子である私に、住職を継がせることにはこだわっていた。そのことが、私にとっては重荷であり、迷惑であった。

あらためて父の人生に思いをいたすと、私同様の道を歩んできたのではないかと思う。お寺の長男として、両親やご門徒など、周囲にうながされ、住職となったのだろう。それを本人がどう受けとめていたのか、聞いたことはない。だが、長年住職を務めるなかで、数かぎりない先達が、お念仏申して、本願に出遇うよう願ってくださっているというわが身の事実に気づかされ、そして、息子である私も、同じく願われてあるということ、無口な父は、「住職になれ」という言葉で、私に伝えたかったのではないか。

そんな父を疎ましく思って生きてきたが、その存在丸ごとが、私にとって南無阿弥陀仏の勧めであり、本願に出遇うようにという促しであった。お念仏申して、お念仏のいわれを聞いて生きよという、私にかけられ続けてきた願いが、父という存在となって、私に届いていたのだ。

真宗寺院の住職であることは、若いころ夢見ていた人生ではない。しかし、私の都合を超えて、まさにいま、大事な道、尊い歩みを、わが身のうえに賜っているのではないか。そんなことを思いながら、葬儀の準備を進めている。(編集委員 比叡谷 真)

編集後記 the editor's note

『教区だより』は昨年5月号より新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で編集会議が開催できなくなり、出版小委員会に代わり教務所編集のもと「特別号」として発行してきましたが、今月号より出版小委員会編集のもとで再開することになりました。段階的に内容を充実させていく予定です。ご期待ください。

昨年5月号から休載となっていた四衢 亮氏の連載「悲しみが通じあう時一愚禿悲歎述懐を通し

て一」を再開します。再開にあたり今月号に昨年4月号の第1回を再掲載します。第2回と合わせてお読みください。また、「特別号」にて親しんでいただいております「今、この時に、親鸞聖人に遇う」は次号より継続して掲載していく予定です。

今月号の『教区だより』はZoom会議を駆使して編集してきました。新しい形の『教区だより』をこれから作っていくと思うと苦労はあるでしょうがワクワクしますね。(編集委員 蒲池 義生)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第375号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2021(令和3)年5月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

